

地元は乗り気でなかった。それでも宮内庁側は重ねて訪問の意向を告げてきた。



伊勢湾台風の被災地視察のため名古屋に到着した皇太子明仁さま＝1959年10月4日、国鉄名古屋駅、朝日新聞社撮影

天皇陛下は皇太子時代の1959年10月、伊勢湾台風の被災地を訪れている。当時25歳。4月に結婚した皇太子妃美智子さまは懐妊中で、単身での訪問だった。

伊勢湾台風は59年9月26日に東海地方を襲い、暴風雨と高潮で愛知、岐阜、三重3県の平野部が泥水につかった。約5千人が死亡・行方不明となり、100万人以上が被災するという甚大な被害が出ていた。

皇太子明仁さまの列車が国鉄名古屋駅に着いたのは台風来襲8日後の10月4日午前11時25分ごろ。東海道新幹線が64年の東京五輪直前に開通する5年も前。午前7時に出発する特急「第一こだま」で4時間以上かかった。

月刊誌「日本」59年12月号にルポ「皇太子水害地に行く」が載った。筆者は中部日本新聞（のちの中日新聞）の宮岸栄次社会部長。

「田という田は一面の水びたし。豚やニワトリの死骸が浮き、木ぎれやゴミがただよう中で、収穫期を前にした稲は重く水中に頭を垂れて死んでいた」。車窓から見えたであろう風景をこう描き、地元の状況について「災害救助法発動下の非常事態であるため、地元では皇太子の視察、お見舞いなどどう受け入れられる態勢ではなかった」と指摘した。「さきに天皇ご名代として来名（名古屋来訪）される話があったときにも、すでにおことわりするハラであったし、今度もはじめから乗り気でなかった。十分な準備や警備は、むろんできないばかりか、そのためにさく人手が惜しいほどだったのだ」と。

それでも宮内庁側は「重ねて来名の意向を告げてきた」という。

「いま見舞っていただいても、なんのプラスもない。被災者にとっては、救援が唯一のたのみなのだ。マッチ一箱、乾パン一袋こそが必要なのだ、というのが血の叫びであった」とまで書いた。

皇族が被災地を訪れる前例は、23年の関東大震災で大正天皇の摂政だった裕仁皇太子（のちの昭和天皇）や48年の福井地震での三笠宮などがある。今回の伊勢湾台風被災地訪問は、皇太子明仁さまの強い意欲もあった。

避難所訪問は当日昼、愛知県庁での昼食中にやっと話がついて実現した。



被災児童と話す皇太子明仁さま—
1959年10月4日、岐阜県鶯沼町
(現各務原市)、朝日新聞社撮影

1959年10月4日。当時の皇太子明仁さまは、東海地方に猛威をふるった伊勢湾台風の被災地視察のため、名古屋市を訪れた。復旧作業で忙しい地元には迷惑をかけないように、随員は皇太子家を支える東宮大夫のほか侍従、侍医、事務官、護衛が1人ずつ。ふだんの地方訪問の半分以下の人数だった。

皇太子さまは愛知県庁貴賓室に入り、「このたびの台風により非常に大きな被害をこうむり、とくにおびただしい犠牲者を出したことはまことに同情にたえない」とする天皇陛下からの御見舞いの言葉を桑原幹根知事に伝えた。そして自身の見舞金を渡した。

当時中部日本新聞（のちの中日新聞）社会部長だった宮岸栄次氏のルポや新聞記事などによると、皇太子さまはこのとき「まだ消息のわかっていない（人がいる）ところはありますか」「干拓地が使えるまでにはずいぶんかかりますか」などと尋ねたが、侍従が質問を途中で止めたという。

この後は自衛隊ヘリで上空から被災地を視察する予定だったが、雨のため中止となり、岸信介首相が随行し、車で陸路、岐阜市に向かった。岐阜県庁では松野幸泰知事から説明を受けると、皇太子さまは「耕地がやられたら米は減収になりますね」「水は全然引きませんか」と尋ね、「被災者はこれから寒くなるから大変でしょうね」と感想を語り、予定時間を超えて話を聞き続けた。

名古屋へ戻る途中の午後4時半ごろ、皇太子さまは希望して岐阜県鶯沼町（現各務原市）で車を降り、そこにいた女子小学生2人に「家はどうなったの」と声をかけた。2人が無言でつぶれた家を指さすと「大変だね。いまどこにいるの。気を落とさないでがんばってね」と励ました。

このあと、宿泊先に近い名古屋市中区の名城小学校分校（現・名古屋市立御園小学校）を訪れる。分校には、沿岸の同市港区で家が水につかった小中学校の児童生徒139人が、集団で都心に避難していた。

避難所訪問は、地元側が「被災者の気持ちが悪く落ち着いていない」と辞退していたが、宮内庁側が「天皇陛下のお考えを皇太子さまが果たすためには、被災地視察よりもむしろお

皇太子さまに声をかけられた少年。愛知県防災局長となり、災害対策を担った。



被災児童を激励する皇太子明仁さま。岸信介首相も随行した＝1959年10月4日、名古屋市中区、朝日新聞社撮影

名古屋市港区に住む酒井俊幸さん(73)は1959年10月4日、避難していた名古屋市中区の名城小学校分校(現・名古屋市立御園小学校)で、訪れた皇太子明仁さまから声をかけられた。当時中学3年。「どんな会話をしたか覚えていません」というが、情景は鮮明に記憶に残っている。

59年9月26日夜、伊勢湾台風による大雨と高潮で庄内川の堤防が壊れ、酒井さんの家は水没した。父母と祖母、4人きょうだいの7人は真っ暗な屋根の上で一晩を明かした。泥水がなかなか引かない中、子どもたちは名古屋市の中心部に避難した。繊維問屋街がすぐ近くにあり、服や布団が配られたことを覚えている。

皇太子さまは岸信介首相、桑原幹根愛知県知事とやってきた。子どもたちは教室に集められ、並んで座って待っていた。

当時の新聞記事によると、まず校長が「この方が皇太子さんです。こちらはテレビでよく見る岸さんです」と紹介。皇太子さまは「病気の人はいませんか。親はどうしていますか」と尋ね、「いろいろ苦しいこともあるでしょうが、気を落とさずにがんばってください」と励ましたという。

記事には、「ぼくらだけ見舞ってもらって幸福だ」と記者に語った酒井さんの言葉も載った。数日後には、皇太子さまに声をかけられた生徒として、テレビ出演もしたという。

酒井さんはその後、愛知県職員になった。県地方課、企画部などを経て防災局長に就任。就任前の2000年にあった豪雨を受けての災害対策などを担当した。「伊勢湾台風のとときの体験をよく思い出しました」

自身の体験から得られた教訓は、水害では必ずしも家の外に避難すればいいとは限らないということ。「屋外で洪水に巻き込まれれば、かえって大けがをする危険もある。家の中にとどまった方がいい場合もある」。04年10月の中越地震で新潟県に応援職員を送り出す際も、自身の経験から「被災地には何も無い。非常食を持って行くときには器も箸も準備しないと役に立たない」と助言した。

天皇陛下は伊勢湾台風での被災地訪問を原点に、被災地見舞いを重ねてきた。酒井さんは「困難に直面した国民のもとへ直接行って

皇太子明仁さまと岸信介首相（当時）
 1959年10月5日、名古屋市の名城公園、朝日新聞社撮影



1959年10月5日。伊勢湾台風の被災者を見舞い、名古屋で1泊した皇太子明仁さまは、午前9時過ぎに自衛隊ヘリに乗った。隣に座る岸信介首相は背広に革靴だったが、皇太子さまは背広に長靴を履いた。

愛知、岐阜両県の上空からは、一面泥水につかったまま、ゴミが多数浮かぶ被災地が見渡せた。津市に降り立ち、三重県庁で田中覚知事から説明を聞いた。

皇太子さまの被災地訪問については、歓迎の声ばかりではなかった。

訪問前の読売新聞（10月3日付）には「皇太子視察は考えもの」という題で東京都の男性の投書が載った。「国民に対するご心痛のあらわれに、一応われわれは好感をもつが、ほんとうのところ、皇太子は行かれない方がいいのではないか」「現実には車をすてて、それこそ長グツ姿で泥と死体のただようところまでふみ込んで行ってこそ、視察も見舞いも真の誠実さと価値を發揮する。キレイごとの視察見舞いは、被災者の沈痛な心理に逆作用を起すおそれがある」

さらに「皇太子のご警衛などで、たださえ不足な警察官が手をとられたり、物資輸送のトラックが通行止めをくったりしたのではかえって逆効果だ。現地で渴望しているのは、食糧と電灯と水と他の物資であって、人間ではないからだ」とも。

しかしこの日、皇太子さまが鈴鹿市の鈴鹿電気通信学園の避難所に立ち寄り、被災者に声をかけると、感涙する女性もいたという。

皇太子さまは視察を終え、午後2時半から宿泊先の名古屋観光ホテルで記者会見した。被災地を初めて見た感想を聞かれて、「ただただ被害が大きすぎて、何と云ってよいか言いようがない感じでした」と話した。

「台風の被害が未曾有の規模で、悲惨のきわみであることは新聞などで知っていたが、現地を見て、言葉で言い表せない痛ましい気持ちでいっぱいになりました。亡くなった多くの人たちや、目の前で肉親を失った人たちを見ると、胸がつまる思いです」

2009年12月の天皇誕生日には「伊勢湾台風から50年になります。当時ヘリコプターに乗って上空から、一面水に浸った被災地の

皇太子さまの被災地視察。「考えもの」と批判する投書も新聞に載った。

貝原知事は陛下と同一年。「来ていただくことに意義がある」と語っていた。



バスから降りた天皇、皇后両陛下。陛下の後ろは貝原俊民・兵庫県知事＝1995年1月31日、神戸市長田区、朝日新聞社撮影

1995年1月17日午前5時46分、兵庫県を震源とする最大震度7の地震が西日本一帯を襲った。阪神・淡路大震災だ。総務省消防庁や兵庫県によると、死者6434人、住宅64万棟が被害を受けた。

天皇、皇后両陛下が被災地を訪れたのは2週間後の1月31日だ。訪問の意向は1週間ほど前に宮内庁から兵庫県に伝えられた。県知事公室次長兼秘書課長だった齋藤富雄さん(72)を中心に、秘書課の行幸啓担当主査だった前田秀俊さん(60)らが準備を進めた。

参考にしたのは、93年7月、北海道南西沖地震で被災した北海道奥尻町訪問だった。道庁に電話で教わり、「お迎え案」を作った。問題は、阪神・淡路大震災が大都市直下型の大地震だったことだ。ピーク時の1月23日には1150カ所の避難所に約32万人が避難するなど、被災者が桁違いに多かった。

奥尻島の移動は、両陛下が乗る車1台と随員者が乗るバスの計2台が基本だった。しかし、貝原俊民兵庫県知事(2014年死去)は「車2台だと、被災者の受け止めがいろいろあるのではないか」と考え、県は「バス1台に両陛下も随員も乗っていただくことは可能でしょうか」と宮内庁に打診した。

宮内庁は「わかりました」と同意した。バスは、兵庫県でも震災の被害が軽かった県北部の但馬地方から運転手も含めて調達した。被災者の中には不安やいらだちを募らせる人もいた。村山富市首相(93)は発生2日後の1月19日に被災地を訪問したが、「目線が高い」などと批判を浴びていた。

齋藤さんには心配もあった。だが、「両陛下がおおいでになれば、きっと打ちひしがれている被災者も励まされ、再起のきっかけになる」と考えた。

貝原知事は当時61歳で陛下と同一年。「皇太子時代から親しみを感じており、来ていただくことに意義がある」と語ったという。

震災6年後の01年4月に両陛下が被災地を再訪した後、5月に退任を表明した。「震災で6400人も犠牲者を出したはじめをっけたい。両陛下による視察も一つの節目となつた」と語った。